

愛知県におけるエスニックコミュニティの研究(2)

— 新川町の在日韓国・朝鮮人集住地区X地域を事例として —

山本 かほり

1. はじめに

本稿では前稿¹に引き続いて、愛知県新川町にあるX地域という在日韓国・朝鮮人²の集住地区について考察することを目的としている。前稿では、X地域に居住する在日韓国・朝鮮人の生活史を紹介することによって、X地域に住む在日韓国・朝鮮人の戦前から現在に至る暮らしぶりを概観した。そして、そこから4つの課題を設定している。本稿においては、そのうち、③にあげたX地域に居住する在日韓国・朝鮮人のミクロな生活史から、彼／彼女らの生活世界を描くこと、そして④地域の在日韓国・朝鮮人と日本人との民族関係³を考察することを課題としたい。

新川町は、名古屋市の中心から5kmのところにある人口1万8千人ほどの町である。この町には戦前からかなりの数の在日韓国・朝鮮人が住んでいる。その数は、統計がとられはじめた1979年には、約600名であった。その後、毎年僅かずつ減少し、現在は400名前後となっている(図1参照)。ただし、2001年3月末における新川町の全外国人登録者数は450名なので、在日韓国・朝鮮人の比率が圧倒的に高い町であると言えよう。近年、愛知県下で顕著にみられる日系ブラジル人の流入はほとんどなく、2001年3月末ではわずか12名が登録しているのみである。

新川町の在日韓国・朝鮮人の多くが、本稿で扱うX地域に住んでいる。X地域は、最寄りの駅から徒歩で15分ほどのところにあり、戦前から「朝鮮部落」と周囲の人々に認識されてきた地域である。ただし、地域は決して隔絶されているのではなく、隣接の地域とは道一本で隔たれているだけである。ちなみに、2000年の国勢調査によると、X地域を含むY地区の外国人人口は248名である。国籍など明らかにはならないが、ほぼ全員が韓国・朝鮮

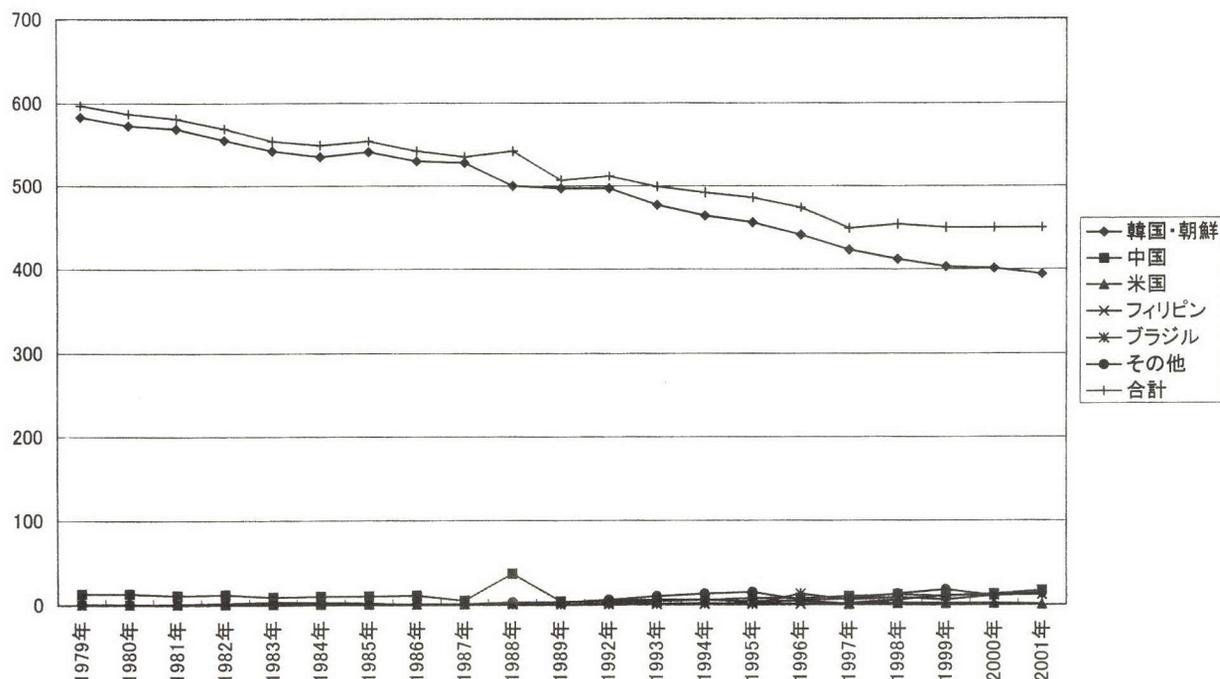
籍を持ち、X地域に居住していると推察される。

X地域内を歩いてみると(一本、一本の路地に入ったとしても、10分ほどで一週できるほどの狭い地域ではあるが)、戦前からの長屋が建ち並び、その合間に近年建て替えられた比較的新しい家が目に入る。区画は、戦前からそのままであろう。狭い路地が迷路のように入り組んでいる。新川町で長年保育士をやっていた女性は「あそこには一人では入れないなと思っていました。迷ってしまって、出てこれなくなるような、そんな気がして。だから、子どもの親に会いに行くのも、子どもに案内をしてもらってましたね。今は路地もアスファルトになっていますけど、30年前は舗装もされていませんから、ドロドロの道を歩くような、そんな感じでした」と回想する。この言葉には誇張もあるだろうが、X地域に余所の者が入った時の「実感」をよく表しているものだと思う。

今では空き家となっている家もかなりあり、また、おそらく高齢化も進んでいる⁴のであろう。地域に入って受ける第一印象は「殺伐としている」といったものである。

X地域は、戦後、在日本朝鮮人連盟(朝連)および、それを継承した在日本朝鮮人総聯合会(総聯)の影響が強かった地域である。総聯という組織主導ではあるものの、西春地区の民族運動や民族教育の拠点でもあった。地域の中心には、総聯が運営する愛知朝鮮第九初級学校があり、教育を通じて、言葉や文化など民族性を継承しようという営みが行われてきた。しかし、時代の流れで、児童数が減少し、学校は1976年頃には休(閉)校になった。今では、校舎と校庭が荒れ果てた姿で残っているだけである。

図1：新川外国人登録



前稿でも述べたように、この学校跡地のほかには、現在、X地域が在日韓国・朝鮮人の集住地区であることを顕著に示すものは少ない。各家が掲げている表札も日本名であるし、例えば、朝鮮料理には欠かせないにんにくや赤唐辛子を干しているという風景もあまり見かけない。現在のX地域は、表面上は戦後の再開発から「取り残された」地域にしか見えない。しかしながら、地域に住む在日韓国・朝鮮人と日本人に生活史を中心とした聞き取り調査を行うと、そこは、確かに、在日韓国・朝鮮人のコミュニティであり、そこには、日本人の生活から見ると「異質な」生活世界が存在していた（そして、以前のような活気はないけれども、現在も存在している）ことがわかるのである。

ところで、X地域のように小規模ではあるが「異質性」が高い（地域内の外国人人口比率が高い）地域に関する研究は、原尻英樹（1989）による九州の旧炭坑・筑豊A地区という在日韓国・朝鮮人（原尻は「在日朝鮮人」という呼称を使用）コミュニティ研究がある。原尻は、人類学の手法を用いたインテンシブなフィールドワークによって、筑豊A地区を調査し、在日韓国・朝鮮人の生活世界の分析を行っている。その分析は、「在日朝鮮人文化」全般（生活・職業・言語・教育・宗教・近隣関係）にわたり、地区の在日韓国・朝鮮人の生活を「ありのまま」に記述したものである。

谷富夫（2001）は、原尻の研究を「エポック・メイキング」的なものであると評価しながらも、日本人との民族関係を捉える視覚が欠如しているという。また、日本人との関係に関する記述はあっても、その描写は「排除」「民族の隠蔽」「差別」「対立」といった「分離関係」に偏り、また「結合関係」についての記述があるにも関わらず、「結合一分離」の対比が必ずしも明示的でないとしている。その結果、筑豊A地区の在日韓国・朝鮮人の生活世界の描写が不完全なものになってしまっているという。（谷，2001：278-279）。

谷は、原尻の研究に限らず、従来の民族研究に民族関係の視点が希薄だったことを繰り返し指摘している。そして、在日韓国・朝鮮人と日本人は、いかなる条件下、民族関係を結ぶことができるのかという問題を追究し続けている。谷が大阪市生野区の在日韓国・朝鮮人集住地区で知られる「猪飼野」で行った住み込み調査⁵の成果、および、その後続く一連の研究⁶は、このような問題に意識が支えられているものである。

谷の問題意識をうけて、共同研究者の一人である西田芳正（2000：409）は、地域社会において、在日韓国・朝鮮人と日本人が「顕在結合」の関係を地域社会で取り結ぶための条件に「集住地効果」をあげている。これは、「民族を同じくする者が多数居住する地域において民族性の表出がなされており、また、日本人との関係も

比較的良好なものとなっている」というものである。そして、この効果を逆照射するものとして、集住地区で成長した後、民族的に孤立した地域に暮らす家庭へ婚入した在日韓国・朝鮮人女性が、そこでは、自らの民族性をすべて取り去った生活をした、つまり、日本人社会での生活が民族性の顕在化を抑制することにつながったという興味深い事例を紹介している。

本稿においては、これらの研究成果をふまえて、X地域の在日韓国・朝鮮人の生活世界を包括的に描写してみたい。X地域は、筑豊のように炭鉱があったわけでもなく、集住地となる歴史的形成過程は大きく異なる。つまり、筑豊A地区に住む在日韓国・朝鮮人のように「炭鉱」を核とした個人史を地域が共有しているわけではない。X地域の場合、後述するように、製紙会社の荷役として働いていた者が住んでいたという事実はあるものの、その会社を核としてX地域が形成されとは考えにくい。

また、大阪市生野区のように大規模な集住地区かつ日本人との混住化が進んだという地域でもない。X地域内の人が「朝鮮部落」だと認識している範囲内には、「60世帯くらいの朝鮮人がいて、日本人は4-5世帯」というほど、小規模で、かつ、いわば「純粋な」在日韓国・朝鮮人のコミュニティである。こうした特徴をもつX地域の在日韓国・朝鮮人の生活世界や民族関係は、どのようなものであろうか。

ところで、このような課題の背景にある問題意識には、日本国内の「国際化」状況があることは、再度、確認しておく必要がある。1985年のプラザ合意以降、急激にすすんだ円高と好景気による労働力不足から、日本国内には「ニューカマー」と呼ばれる外国人労働者が急増した。その後、日本の経済状態が不況に転じたにも関わらず、その数は増加し続けている。2000年末の法務省の統計によると、外国人登録者数は1,686,444人。これは、1985年末の数(850,621人)と比較すると、じつに98.2%の増加率となる。さらに、少子高齢化の進展の中で、海外からの労働力の移入は、もはや避けて通ることができない道であると予測されている。また、外国人労働者の滞在も長期化・定住化の傾向にあり、「住民」として、コミュニティの中で日本人とともに暮らすようになっていく。

そして、このような事態は日本社会にとって、はじめての経験ではないことは確認しておかねばならない。朝鮮半島からの流入者が1万人を超えたのは、1917年のことである。その後、増加の一途をたどり、特に、朝鮮人の強制連行がはじまった1939年以降は、1945年の敗戦まで、年間20万人以上の増加を示している⁷。当時から現

在に至るまで日本で最大の朝鮮人居住地である大阪に限ると、1930年代には、人口の1割以上が朝鮮人だったという事実が確認できる(杉原, 1997: 54)。

このような史実は、現在、日本各地の地域社会が経験している異民族との共存という切実な問題を、過去においても日本社会が経験してきたことを示している。本稿では、外国人労働者の流入という今日的な問題を念頭におきつつ、その先行事例のひとつとして、X地域を扱うのである。

2. 戦前における新川町への朝鮮人流入とX地域の形成

さて、それでは、新川町へ朝鮮人が流入し、X地域を形成した過程はどのようなものであろうか。資料の制約があり、明らかにならない部分が多いが、前稿を補足する意味も含めて、まずは概略を検討しておこう。

新川町は、1906年に新川、桃栄、阿原、寺野の2町2村を合併して、現在の町域となった町である。『日本地誌 第12巻 愛知県・岐阜県』(1972: 239)によると、新川町の市街地形成は古く、清洲城の城下町のころからで、当時、現在の名鉄須ヶ口駅周辺は、遊女屋街として栄えていたという。

新川町の産業構造は、元々は「八割は農家であったから農村経営が主で、工場等は極めて少な」(新川町, 1955: 131) だったが、1925年に豊田式織機株式会社(現「豊和工業株式会社」)の工場が設立され、それが、新川町の産業化の基礎を築いたと言われている。新川工場は、1929年頃から本格的に操業を開始し、それにともない、それまで7,000名前後で推移していた新川町の人口も、一気に1,000名ほど増加し、8,000名前後で推移するようになった。そして、1935年には1万人を突破し、それ以降、人口は増加を続けた(表1参照)。

新川町に流入してきた人の中に、朝鮮人がどのくらいいたのかは、統計がないために明らかではない。1938年の国勢調査報告で、新川町に男114名、女74名、合計188名の「外地人」の存在が報告されているのみである(『昭和5年国勢調査報告 愛知県編』)。しかし、『新川町誌』は、豊田式織機株式会社が新川工場を設立したことに触れる中で「当時朝鮮人の内地移住が漸増、工賃の安価と労働力の増加に依って本町の発展は急激な進歩を遂げたのであった」と述べる。こうした記述から、愛知県の産業化に連動するようにして起こった新川町の産業化にともなって、朝鮮人が流入してきたことは推察できよう。そして、1936年には、練炭職員の朝鮮人が町会議員に当選したという記録も残っている(在日本大韓国民団愛知県本部, 1998: 37) ことから、一定の数の朝鮮

人が新川町に居住するようになっていたと考えることができる。

表1：戦前の新川町人口推移

年	男 (人)	女 (人)	合計 (人)
1903	1,053	1,036	2,089
1925	3,572	3,465	7,037
1926	3,512	3,404	6,916
1927	3,504	3,407	6,911
1928	3,528	3,495	7,023
1929	4,070	3,951	8,021
1930	3,929	4,025	7,954
1931	3,747	3,741	7,488
1932	3,770	3,764	7,534
1933	4,046	4,006	8,052
1934	4,472	4,319	8,791
1935	5,107	5,025	10,132
1936	5,474	5,394	10,868
1937	5,583	5,502	11,285
1938	5,765	5,652	11,417
1939	6,468	5,968	12,436
1940	6,609	6,025	12,634
1941	7,079	6,212	13,291
1942	6,401	6,294	12,695
1943	6,352	6,421	12,773
1944	6,303	6,524	12,827
1945	6,241	6,685	12,926

しかしながら、X地域が朝鮮人の集住地区になった経緯については明らかではない。一般的に、朝鮮人が就労先と住居を求めるにあたって、血縁・地縁関係が大切な役割を果たすことは、これまで多くの調査研究が明らかにしている。X地域も例外ではない。X地域には、慶尚南道の出身者が多く、その中でもハマンを本貫とするある一族が特に多い。X地域でも、先に来日していた親族や同じ故郷の人を頼って、朝鮮人が流入してきたことは間違いないであろう。ただし、なぜ、X地域に集まったのかという点について、聞き取り調査から分かるのは、前稿で記したように、X地域に隣接した新川の堤防沿いにあった新川製紙の下働きとして、多くの朝鮮人が雇われていたことと密接な関係があるということのみである。これについて、1937年にX地域に移り住むようになったある日本人男性は次のように回想している。

「12歳のときにここ（X地域）に来た。その頃には、もう朝鮮の人はここに住んでいた。朝鮮の人も日本人もみんな貧乏で、仕事は土木。あと、朝鮮の人は、あそこにあった新川製紙へ行っるとという話を聞いたなあ。そこで、どんな仕事をしとったかは知らん。でも、新川製紙で働いているっていう話は、よう聞いた。」（Sさん）

また、1936年にX地域で生まれ育った在日韓国・朝鮮人男性・Aさんも「朝鮮人は、新川製紙で働いとった。荷役や。あの頃、新川に船が着いて、紙の原料の藁が陸に上がってきたんだ。それを朝鮮人が運んでたんだ」と語る。

このような話は、他の在日韓国・朝鮮人からもたびたび聞かされた。しかし、それを裏付ける資料は残念ながら見つかることができなかった。新川製紙が1944年にA工業によって買収されたからである。A工業の社史には、新川には、大正期の末期から動力船が運行し、各種の産物が各地から舟運されていたこと、そして、その中に、海部、鍋田方面から製紙原料の稲藁があり、それが工場前堤防下の岸まで運ばれていた（A工業株式会社、1988：28）というコラムが掲載されているので、荷役として雇われた朝鮮人たちが、工場前堤防のすぐ下にあるX地域を居住地として選択したことが、集住地形成の一要因になったことは確かであろう。

さらに、もう一点考えられる要因は、X地域の地勢的な条件である。X地域は、新川と五条川が交差する三角地帯に位置し、水害を受けやすい低湿地帯⁸であった。1940年頃、結婚でX地域に来た在日韓・国朝鮮人女性は次のように言う。

「ここに来た時、私でも驚いたよ。どぶ池の上に家が建っているようなもんだった。ひどい生活だよ。床下に豚を飼って・・・豚と人間が一緒に家に住んでいるような感じ。」（Bさん 1931年生）

このようにX地域の土地の条件が悪かったことも、朝鮮人の流入を容易にする条件の一つであったことは間違いないだろう。金賛汀（1997：219）によると、「朝鮮部落」の成立過程には二つのパターンがあるという。一つは、日本人地主が借家や長屋を建てたが、環境が劣悪なため、日本人が住みつかず、朝鮮人が住むようになったというもの、もう一つは、河川敷などに、「不法」で、バラック小屋を建てて住むようになったのが大きくなったというパターンである。X地域は前者のパターンで、低廉な家賃の長屋に朝鮮人たちがひかれて、居住地としたことも、X地域が集住地区となった一因であろう。

X地域の形成についてわかっているのは以上である。要約すると、血縁・地縁を媒介として、(1)住居の確保、(2)就労先（それは、極めて不安定な単純肉体労働ではあったが）の獲得がなされたことにより、朝鮮人が集住する条件が整ったと考えることができる。

3. 戦後のX地域における在日韓国・朝鮮人の生活世界

前節では、戦前期における新川町への朝鮮人の流入過程を概観し、X地域の形成のプロセスを検討してきた。それでは、戦後、在日韓国・朝鮮人たちは、X地域にどのように定住し、どのような生活世界を生きてきたのだろうか。ここでは、地域内の在日韓国・朝鮮人9名および1組の日本人夫婦から聞きとった生活史を中心に、記述・検討することにした。

3-1: ウェス加工業

「戦後、朝鮮人が増えた」。X地域で調査中、在日韓国・朝鮮人からも日本人からも何度も聞いた言葉である。実際はどうだったのかは、統計がないのでわからない。しかし、これは、当時X地域内に住んでいた人の実感なのであろう。日本の敗戦により、朝鮮半島は植民地支配から解放されたが、同時に、日本にいた多くの朝鮮人は職を失った。そこで、X地域に住んでいた親族や同郷の人を頼って、新たに朝鮮人が流入したようである。現在は名古屋市内に住む一人の在日韓国・朝鮮人は次のように語る。

「日本が戦争に負けて、私も仕事がなくなりました。（それまでは）工場の下働きのようなことをしていました。朝鮮人だから、日本人よりも給料は低かったんですが、それでも仕事は他の日本人と同じように。でも、戦争が終わって、仕事に行ったら、『もう来なくていい』って。まあ、工場自体もなくなったわけで、どうしようもないです。何の保障もなかったからですね。やることないから、人に誘われて、闇（商売）をやりました。お金にはなりましたね。でも、私には向いてなかったのか、長続きしなかったですね。それで、親戚を頼って、X地域へ行ったんですよ。戦後、仕事ない。日本人にだってないのに、朝鮮人にあるわけないでしょ。Xには『親戚とポロ屋があるから、何とかなるだろう』って思って（行った）。」（Cさん 1928年生・男性）

この語りにある「ポロ屋」とはウェス加工業のことである。新川町におけるウェス加工の歴史は、明治初期に始まる。元々「ポロ商」として町内の日本人が始め、そ

の後、業者が増加していった。大正末期には、米国への輸出も開始され、業界は発展をみせたようである。1939年頃から業界では「故繊維工業」と呼ぶようになり、手袋、油拭き、パフ、雑布など多様なものを加工していた。終戦後の一時期は、新川町内には100軒を数えるほどの業者があったという（新川町、1955：566-567）。そして、前稿でも述べた通り、X地域で、ウェス加工が盛んになったのは戦後のことである。戦前から、一部の朝鮮人女性は、近所にあるウェス加工業者（日本人経営）で働いていたが、戦後になって、ほぼ一斉に、朝鮮人たちが自宅にミシンをおいてウェス加工を始めた。

「戦後、朝鮮人の仕事って言ったら、クズ拾い。俺もやっていた。（ウェスは）その流れじゃないか。要するに廃品回収……。クズ鉄拾う代わりに、ボロを仕入れて、ウェスを作る。新川には、戦前からウェスやるところはあったからな。元手も大していらぬし。玄関にミシンおけばできる。朝鮮人でもできるってことで、みんな、始めたんだらう。あれこれ職を選べるような状況じゃなかったしな。逆に言えば、ウェスがあったから、新川の朝鮮人は祖国に帰らんでもよかったとも言えるな、うん。」（Aさん 1936年生・男性）

ところで、在日韓国・朝鮮人に限らず、移民（流入）労働者の就労構造を分析するにあたって、「二重労働市場論」がしばしば用いられる。それは、「中心部」（近代的産業労働）と「周辺部」（低賃金の未熟練単純労働）という「労働市場の二重性」を相互不可分なものとしてみなす立場で、資本主義経済のもとでは、「中心部」と「周辺部」という階層的な職業構造は「基本構造」として存在し、周辺部の下層労働を担う者は必ず必要とされるという。

稲月正（1996）は、こうした議論をふまえた上で、朝鮮人労働者が日本の労働市場の周辺部に組み込まれていくプロセスを分析している。稲月によれば、明治以降の日本の産業化の進展によって、中心部においては、「よりよい仕事口」が増加し、上昇移動の可能性が広がっていったという。それによって、日本人労働者は、周辺部の領域から撤退が進み、同時に、そこに生じた最下層の労働市場の空席に、朝鮮人労働者が投入されたのだという（稲月・山本、1996：67）。

しかしながら、X地域の在日韓国・朝鮮人がウェス加工に従事するようになったのは、戦後、朝鮮人たちが「周辺部」領域からも、いったん、排除された結果であるということに留意しなければならない。日本の敗戦に

より朝鮮半島が植民地から開放されたこと、また、日本人の復員や引き揚げにより、「周辺部」領域の労働力も過剰になったなどの理由から、朝鮮人たちの多くは解雇された。

職を失った朝鮮人にとって生きる術は限られており、闇物資の仕入れやクズ鉄拾いなどが主たる「仕事」となった。そして、その中から、店や工場を構え、小売り・小生産など商工自営を始めるものがでてきた。X地域における在日韓国・朝鮮人のウエス加工業も、その流れの中にある。前述の在日韓国・朝鮮人男性の「クズ鉄がポロ(布)に代わっただけ」という語りがそれを端的にあらわしているであろう。

また、谷富夫(2000:111)は、大阪市生野区に住む町工場の職人を多く持つ親族の生活史を分析し、彼らの仕事が「ニッチ(隙間)からの出発」だったと述べている。つまり、「余所の嫌がる仕事」を積極的に請け負い、そこからの事業展開を狙うというのが、当該親族の戦略であると言うのである。

ウエス加工業も、日本人が嫌がる仕事であり、ニッチ産業というべきものであった。「家中に(古着から出る)悪臭がたちこめ、仕事を始めた当初は、とにかく気持ちが悪くて……。いつも青い顔をして、病人のようだったよ」「臭いが気持ち悪くて、ご飯も食べられない。夜も寝られなかった」という語りからも、その辛さは想像できるであろう。ウエスの材料になるものは古着で、その中には下着も含まれ、しかも、洗濯も十分になされていないものばかりだったのである。悪臭と闘いながらの仕事だった。

しかし、それでも、X地域に在日韓国・朝鮮人たちにとって、ウエス加工業は生きていくためには「手っ取り早い」仕事だった。簡易機械(ミシン)1台あれば創業でき、また、高度な熟練を必要としない安価な労働力による単純な手作業の組み合わせによって、製品化することが可能だったからである。ウエスの出荷先は、小規模な鉄工所から大資本傘下の工場まで広範囲だったようである。戦後復興期から高度成長期に、ウエスの需要がどの程度あったのかは分からない。しかし、「毎月1日と15日しか休みがなかったし、忙しい頃は、夜中の2時までミシンを踏んで、朝の5時には問屋が取りに来ていた」とか「毎日、毎日、夜中まで、縫って、たたんで……。それでも間に合わない。子どもが学校から帰ったら手伝わせ、休みの日も手伝わせ、最後は91歳の姑まで駆り出して、それで、ようやく間に合った」などという語りから、相当な需要があったことがうかがえよう。

こうして、戦後、日本の資本主義経済の「周辺部」か

らも閉め出された在日韓国・朝鮮人が、自らが参入できる部門=「隙間(ニッチ)」を探して、そこに居場所を見出し、零細家内工業ながらも、事業を展開し、戦後のX地域に「定住」していったのである。なお、古着をウエスに加工する際に出る端切れ(小ボロ)も、ブローカーによって収集され、岡崎まで運ばれ、反毛やガラ紡に使用された。そうした仕事もX地域内の在日韓国・朝鮮人によって担われたという事実から、ウエス加工というニッチ産業のさらなる「ニッチ」を探し出し、日本で生き抜こうとしたX地域の在日韓国・朝鮮人たちの生き様を垣間見ることができよう。

3-2: 民族運動・民族教育

前にも述べたとおり、X地域は朝連および総聯の影響力が強い地域であった。このことは、政治的、思想的に立場を異にする民団も認めている(在日本大韓国民団愛知県本部, 1997:579)。地域を管轄する民団の支部も1947年には結成されたが、二つの組織の間には対立の歴史が目立つ。新川町における朝連から総聯につながる組織的な民族運動をどう評価するかは、立場によって意見が分かるところであるけれども、戦後、X地域において、朝連および総聯が果たした役割については記述しておく必要がある。

朝連の全国組織発足は、1945年10月15日のことである。日本の敗戦によって独立は手にしたものの、日本に居住する朝鮮人の法的地位は非常に不安定なものになった。朝鮮人たちは、自分たちの生活を守るため、また、それまで植民地支配によって抑圧されていた民族性の回復を求めての結成であった。朝連は全国的な組織であったが、主旨に賛同した在日韓国・朝鮮人たちは各地に支部を結成した。愛知県本部が結成されたのは同年10月22日、そして、県本部の下に支部が結成され、1945年12月までには県内に13の支部ができたという。このうちのひとつが、新川町X地域におかれたのである。

X地域における朝連の活動は活発で、政治的な運動や自分たちの権利擁護運動のほか、地域内の在日韓国・朝鮮人の「教育」も行った。戦後の混乱期、植民地支配に抑えつけられていたものをはきだすかのように「暴れる」在日韓国・朝鮮人たちがいた。X地域とは別の地域で朝連の活動に関わっていた在日韓国・朝鮮人は、そのことを次のように説明する。

「今でこそ、植民地支配がなんだったのか、我々民族にとって、どんなに負の財産をもたらすものだったか、わかっていますよ。でもね、僕らも、当時は子どもから青

年になる時期でしょ。よくわからなかった。気づいたら日本にいて、働いていて。戦争が終わったら、よくわからないけど、周りの大人たちが『解放だ！解放だ！』と喜んでいる。その喜びの意味がわからないから、取り違えてしまって、『俺たちは何をしてもいいんだ』とってしまった奴らがいるんですね。そうなると、あちこちで、暴れるんですよ。まあ、何というか、日本人から見たら『チンピラ』にしか見えなかったでしょうね。闇物資の横領とかケンカとかね……。中にいる人間にしたら、『仕方ないなぁ』って同情もあるけれど、まあ、日本人からしてみれば、そうはいかないですからね。」(2001年7月 宝飯郡小坂井町にある在日韓国・朝鮮人集住地区における聞き取り)

このような状況の下、朝連で活動した者たちは、地域内で「警察のような役目」もしていた。

「戦前は肉体労働で鍛えていますから、みな、腕力はありますよ。暴れる奴に対しては、『そんなことするな！』って。まあ、腕力でぶつかりあう。そういう時もありましたよ。相手も屈強ですが、こちらも、そう簡単には屈しなからね。やっぱり、心情的には理解できても、悪いことは悪い。それは教えなくてはいけないでしょ。やあ、きっと、今では、あんた（調査者）には想像もできないでしょうけど、そりゃ、ホント、悪いことする奴は、僕らの民族にもいましたからね。当時はね、日本の警察は（朝鮮人に対しては）手が出せなかった。だから、僕らが抑えた。じゃないと、僕らの中も混乱しますからね。」(同上)

新川町でも、このような状況に大差はなかったようである。そして、「暴れる」在日韓国・朝鮮人たちを力で抑えていくのと同時に、「教育」も行ったのである。

「昔は、集会やらなんやらありましたよ。今から思えば、ちょっと偏った考えだったかもしれないけど、私にとっては必要なものでした。学校にも行っていませんからね、なんか、よく分からないまま、いろいろなことが起こって……。だから、集会なんかで、勉強して、当時、何が起きているのか（政治情勢）を知りましたからね。わからないままだったら、僕はただのゴロツキになっていたかもしれない。戦争が終わった時、僕はヤケソになっていたから、かなりワル（悪）でしたからね。で、総聯の役員やっている人に諭されて、集会にも出るようになって。暴れているだけでは何も変わらないなって思っ

たですね。」(Cさん)

また、朝連は、子どもたちの民族教育にも力を入れた。最初は寺子屋のような形で教室を開き、子どもたちに民族教育を保障しようとした。

「最初は、Kさんの家の一角を借りて、子どもらに、朝鮮の文字を教えたんだわね。先生なんていないから、朝鮮でちょっと学校へ行って、字を知っている人が教えて。で、その後、みんなで運動して、畑だったのを整理して、木造の平屋の校舎を建てて。地主さんは日本人だったけど、交渉してね。とにかく、自分たちの学校が欲しいってことで。寄付もしたね。警察が来た時⁹もあったけど、がんばったんだわね。」(Bさん)

これは、後には、在日本朝鮮人総聯合会（総聯）が運営する愛知朝鮮第九初級学校にまで発展し、二階建ての校舎も建てられた。学校があった当時は、新川町のみならず、清洲、西枇杷島など西春地区の在日韓国・朝鮮人の子どもたちが在籍していた。

ただ、もちろん、X地域内の在日韓国・朝鮮人の子どもたち全てが、この朝鮮学校に通学したわけではない。政治的・思想的な立場を異にする者や日本で居住し続けることを前提にすると、日本の教育を受けさせる方がよいと判断する者の子どもは日本の学校へ通った。

繰り返しになるが、朝連から総聯に引き継がれた民族運動（政治運動も含む）や民族教育のあり方に対する評価は、立場や考え方によって大きく異なる。X地域内でも、日本各地の在日韓国・朝鮮人社会が経験したように、政治的・思想的な相違に起因した深刻な対立もあったと聞く。しかしながら、X地域内の在日韓国・朝鮮人から聞き取りをしていると、肯定・否定、両方の意見はあったが、多くが、朝連および総聯について語り、また、民族学校についても語っていた。X地域内での影響力の強さは、それに反対する立場をとる在日韓国・朝鮮人との対立を深める一因となっていたことは否定できないが、同時に、地域内の在日韓国・朝鮮人を結束させる力も持っていたと考えられる。

特に、長屋が密集したX地域の中心部に作られた学校は、地域の在日韓国・朝鮮人たちのひとつの拠点として、また、親睦の場としての役割も果たし続けてきたようである。政治的な対立を内包したままであったにしてもである。

「学校の体育祭は地域をあげての行事でしたよ。うん、

その時は、民団も総聯もあまり関係なくなった……。まあね、それも、地域で暮らしている人にはそれほど大きな意味を持っていなかったとも言えるよね。あんな狭いところで、顔をつき合わせて生活してるんだから、民団だの総聯だのって言うていられないからね。だから、体育祭にはみんな来てたよ。立場上、来れない人はいただろうけど、部落のアジメ(=アジュマ(おばさん)の慶尚道の方言)なんかは、みんな来て、騒いでいた。活気がありましたよ、あの頃は。」(Dさん 1940年生・男性)

3-3：社会関係・民族関係

さて、前にも述べたように、X地域は、ほとんど日本人がいない「純粋な」在日韓国・朝鮮人のエスニックコミュニティである。このような地域における社会関係・民族関係はどのようなものであろうか。

3-1で述べた通り、X地域の在日韓国・朝鮮人は、ほとんど休みもなく、早朝から深夜までウエスを作り続けていた。したがって、彼／彼女たちの社会関係は、ほとんどが地域内で完結していた。言いかえれば、地域外で社会関係を形成する余裕はなかったのであろう。その分、日常生活においては、地域内の在日韓国・朝鮮人たちが強い紐帯で結ばれ、民族色豊かな行事を行ってきたようである。

「(仕事で休む暇もなかった)その代わりに、盆と正月は盛大に遊んだよ。部落(X地域)内のみんなで遊んだ。飲んで、食べて、歌って、踊って。ここ(X地域)が本拠地みたいなもので、みんな集まってきて、ホント、盛大に遊んだ。結婚式も3日間やっていたし。近所中、みんな集まる。うん、チェサ(法事)も、ようやっていた。その時も、近所の人みんな呼ばれて、一緒に食べて。チョル(節=先祖の霊に礼をする儀式)は、親戚だけでやるけど、その前と後、食事するときは、近所の人、みんな一緒。そういう時は、半端じゃなく、遊んだね。」(Fさん 1936年生・女性)

「1世が大勢生きていた頃は、生活が朝鮮そのものだったからね。僕が子どもの頃は、本当にそうでしたよ。朝鮮の野菜、唐辛子やゴマの葉っぱ、うん、そうそう、朝鮮カボチャなんかを(空き地で)作っていたりね。朝鮮語も飛び交っていたしね。年寄りの朝鮮語だから、ケンカしてるみたいに聞こえてね。ここ、狭いから、みんな、お互いを知っていて、仲もいいけど、ケンカして悪口言い合いもする。同じ民族の人に助けられ、裏切られ……。そんなことの連続だったと思うよ。うちのアボジ(父)

の生活もそうだもん。でもね、みんなウエスをやってたでしょ、だから、部落を出てたら生きていけない。仕事ないもん。ケンカもしながら、悪口も言いながら、みんなが固まって、寄り合って生きている。そんな感じだったよ。」(Gさん 1956年・男性)

また、仕事上でも地域内で働き口の紹介など、インフォールではあるが強固なネットワークで、お互いを支え合っていた様子も語られる。

「(ウエス加工の仕事は) そうだねえ……。伊勢湾台風の頃までは、よう儲かったんでね、どの家でも、それぞれがやっていたんだね。でも、そのうちに、それほど儲からなくなってね、やめちゃう家もでてきた。でも、家で遊んでいてもしょうがないでしょ。そうすると、ウエスやっている家に手伝いに行ったりね。ボロをたたむのを手伝ったり、ボタンやファスナーはずすのを手伝ったり……。[どこか、決まった家に雇われるんですか?](以下、[]内は調査者の発話) いや、いや、そうじゃなくて、今日はこっちの家、明日はあっちの家っていう感じかねえ。もちろん、決まったところに行く人もあったけれどね。そんなにきっちりしてなかったように思うけどね。様子見て(必要などころへ)行ってたよ。」(Eさん 1931年生・女性)

では、地域内に住む数少ない日本人は、在日韓国・朝鮮人の生活をどう見て、かつ、どのような関係を結んでいたのだろうか。X地域で50年以上暮らしているSさん夫妻の語りを見てみよう。まずは、来住当初の回想である。

「これ(奥さん)は田舎から来たから、朝鮮の人なんて知らなかっただろう。驚いただろうな。私は、12歳からここに住んでいるから、慣れていたっていかね。でも、朝鮮の人っていうのは、夫婦げんかも外でするんだな。しかも、大声で怒鳴りあって。私らには、理解できないだろ。[朝鮮語だから?] そうそうそう。何となく怖くてね、夜も眠れないし。[夜に外でケンカ?] うん、夜中でもやっていたよ。最初は抵抗感じたね。こいつ(奥さん)なんか、来たばっかの頃は、朝鮮の人とすれ違うのもイヤだって言ってた。それじゃ、ここでは生活できないわな。朝鮮の人の中に、日本人がちょこっといるんだからな。」(Sさん 1925年生・男性)

「昭和20年に結婚してここに来ただけだね、最初は、

そりゃ、びっくりしたよ。みんな、朝鮮の人そのままだもの。まだね、年寄りが元気に生きている頃でしょ。着るものも、あの、白い朝鮮の服（チマ・チョゴリ）だったしね。買い物をした後、頭に買ったものをのせて運んでいたし。食べるもんは、全然違うしね。言葉だって、朝鮮語しゃべっていたしね。私らには日本語だったけど、それでも、何を言っているのかわからなかったよ。」（奥さん 1926年生 女性）

しかし、地域内での生活が長くなるにつれ、在日韓国・朝鮮人とも友好的な関係が結ばれるようになってきたと語る。

「長く暮らしてればね、朝鮮の人ともつき合いができますよね。部落（X地域）内では、一緒に酒を飲んだりもしました。僕の上の世代はダメだったけどね。親父なんか、最後までイヤがってたね。でも、僕らはね、段々、朝鮮の人のいいところもわかってくる。〔いいところはどんなところですか？〕朝鮮の人は親を大事にするんだね。それは、感心するくらい。日本人も見習わないといけない。それとね、あんまり、裏表がないんだな。ケンカすると、『殺し合いにならんかな』って思うほどすごいのをやったけど、終わるとケロっと酒を飲んだりしてね。日本人が思うほど悪い人たちではないよ。」（Sさん）

「私は、朝鮮の人のところに働きに行ってたからね。〔ウエス？〕そうそう。ここにはそれしかないからね。子どもがいたから、あんまり遠くには行けない。近所でやるとしたら、ウエスしかないからね。その頃には、（朝鮮の人と働くことは）苦にならなくなっていたね。〔Sさん：こいつ、朝鮮語までしゃべるよ。〕そうだよ、言葉も覚えたね。『パップ モゴ』って言えば、ご飯たべるとか。オモニはお母さんとか、スッカラ（スプーン）とかチョッカラ（箸）とかヘンジュ（布巾）とか。〔それは、工作中に使うのですか？〕そう、おばあさんたちは、朝鮮語でしゃべっていたからね。私にも、朝鮮の言葉でしゃべりかけたり、私も、簡単なのは使ったり。〔料理なんかはどうですか？〕ああ、キムチとかトック（朝鮮の餅）なんかは、もらって食べるよ。おいしい。お父さん（Sさん）は食べないけど、私は好きでね、毎日でも。〔Sさん：俺は口に合わないんだな。〕」（奥さん）

在日韓国・朝鮮人も、地域内の日本人とは友好的な関係を持っていることを語る。「日本の人、少ないけどねえ。でも、この中（X地域）の人とは親しくつき合ってるよ。

私らにいやなこと言う人はいないと思う。Sさんの奥さんなんか、朝鮮人だよ。〔朝鮮人?!〕ああ、朝鮮人みたいだってことよ。朝鮮の言葉も分かるしね。あの人、はす向かいのおばあさんとは朝鮮語で話していたよ。そこらの朝鮮人よりも朝鮮人らしいよね、私らでも感心しちゃう。」（Eさん）

これまで見てきたように、地域内では、在日韓国・朝鮮人は民族性を表出させながら生活をし、数少ない日本人とも友好的な関係を取り結んでいたことがうかがえる。先に述べた「集住地効果」（西田，2000：409）が、X地域内においてもあらわれていることを示す事例であろう。

ただ、Sさん夫妻の語りに見られるように、それは、長い時間をかけてあらわれたものである。Sさん夫妻は、来住当初、X地域の在日韓国・朝鮮人が（無意識のうちに）顕示している民族性に違和感や抵抗感を持ち、「すれ違うのもイヤ」というような「分離」的な志向を持った。しかしながら、地域内の在日韓国・朝鮮人と職場をともにし、また、日常生活のさまざまな場面でも在日韓国・朝鮮人と触れ合ううちに、在日韓国・朝鮮人の民族性を屈辱抜きに受け入れていくようになった、つまり、「結合関係」を結ぶようになったのである。この事例は、二階堂裕子（200：397）が、民族関係の結合のメカニズムとして析出した「異民族が混住する地域社会において、居住歴が長く地域に愛着を感じながら生活する人が、異民族を含めた他者とフェイス・トゥ・フェイスで接触できる職場、学校、そしてその他の地域の集団で、行動を共にしながら価値観や生き方を共有し合う日常を長期的に積み上げた場合、一方で自らの民族性を顕示しながら、他方で民族性以外のアイデンティティ―たとえばクリスチャン、同一階層への帰属意識、同じ趣味の持主、あるいは地域の仲間意識、等々―を共有しつつ、民族を超えた結合の可能性がある」という社会過程が、X地域の在日韓国・朝鮮人と日本人の間に働いたことを示唆するものだと言えよう¹⁰。

3-4：外からの眼差し

しかしながら、X地域を一步外に出ると、日本人社会との関係は微妙なものになるようである。在日韓国・朝鮮人たちは、次のように語る。

「はっきり言って、差別はある。この中にいると、日本の人とも、お互いにつき合いがあるもんだで、私らのこと、よくわかっているから、（差別は）感じない。でも、一步外にでると、『Xの朝鮮部落か』って言われる。私

らと同じ民族の人でも、ここに住んでいることを隠している人もいますよ。Xって言わずに、Yって言うんだわね。住所は、Yになっているからね。でも、私は言うんだわね。『Xで何が悪い?』って。確かにね、昔は、ここで、昼間から酒飲んでドンチャン騒ぎしとったよ。だからね、日本の人が、ここを悪く言ったのもわからん訳ではないよ。でも、今はもう時代がちがとる。だから、私は隠さないよ。Xに住んでるって言う。」(Fさん)

「ここ(X地域)を一歩出たら、もう日本人との付き合いはないねえ。同じ町内(会)の人でも。挨拶くらいはしますけどね、それ以上は(ない)。私たちが考えすぎかもしれないけど、何か、こうあるんだよね……。[壁が?] うん、壁っていうか、こう……。一線を引かれているっていうか。まあ、日本の人は私らのことをよく思っていないだろうって感じる。」(Hさん、1928年生・女性)

「あそこ(X地域隣接域)にマンションができたとき、町内会をどこにするかってなってね。あそこだと、本当は、ここと同じX町内会なんだわね。でも、あそこに住む人たちがイヤだって、別の町内会に入ったんだわ。はっきりとは言わなかったけど、私ら、朝鮮人がイヤってことだと思ふよ。」(Fさん)

また、日本人のSさんも次のように語る。

「外の人は、朝鮮の人のこと、よく知らないから、ここを『朝鮮部落』って言ってバカにしてるよな。新川でも、このXから遠いところに住んでいる人、例えば、線路の向こう側に住んでいる人は、あんまり言わないよな。一番言うのは、この近所の人たちだよ。あそこの道から向こうは「部落」じゃないんだ。だから、あそこら(X地域に隣接した地域)の人が、一番言うんじゃないか、この人の悪口を。[でも、あの辺り、町内会は一緒では?] うん、一緒。でも、町内会が一緒だって、あんまり付き合いもないもんな。会費を集めたりするのは、班の仕事だもんな。班はこの中で作るから。」(Sさん)

そして、隣接地域の日本人の認識は次の通りである。新川町主催の運動会(1998年秋)で、隣接地域の人たちからインフォーマルに聞いたものを取り上げてみよう。

「印象でしかないのですが、あそこの人はすごく団結力が強い、いつもまとまって行動するという感じを持って

います。一人、一人のことはわかりませんが、まとまると、自分たちの意見しか言わないと聞いています。」(40代 女性)

「僕は、近くに住んでいながら、あそこには行ったことはないですね。親が色々言うのを聞いていましたから、行こうっていう気にならなかった。(小・中学校の)同級生はいましたよ。でも、家に行くほど仲良くなかったから。[ご両親からはどう聞かされていたのですか?] 親は、決して良くは言いませんよ。あそこは、日本語が通じない、朝鮮語しか通じないなんていう話も聞きました。もう30年近くも前の話しですが、当時はそうだったんですかね? [いや、30年前だと、もう日本生まれの3世が小学校に入っている頃ですから、むしろ、朝鮮語が理解できない人が多くなっていったと思います。] そうなんですか。僕、朝鮮語しか通じないっていう話し、信じてたなあ。でも、そうですね、同級生は学校に来ていたんだから、日本語は当然わかるか……。単純だったなあ。」(30代 男性)

これらの語りは、X地域内で見出すことができた「集住地効果」が、隣接した地域へは、ほとんど波及していないことを示唆している。冒頭でも述べた通り、X地域は、地理的に他地域から隔離された地域ではない。人々が「X地域」と認識している場所と、FさんやHさんが言う「一歩外に出た」地域を分けるのは、狭い道一本である。それにも関わらず、「集住地効果」や民族間の「結合志向」は、全くといっていいほどあらわれないのである。それどころか、隣接地域の住民との関係において、強くあらわれているのは、「分離志向」であり、実際に取り結んだ関係も「分離関係」でしかない。

隣接地域の住民たちは、狭い道路一本向こうにあるX地域の在日韓国・朝鮮人たちの生活を目にする機会は多々あったであろう。それ(特に1世が健在で中心的な役割を果たしていた時期の生活)は、日本人には、異質なものに映ったに違いない。Sさん夫妻のように、地域内で、在日韓国・朝鮮人と仕事や日常生活を共にした日本人は「地域の仲間意識」といったアイデンティティを共有することになり、民族を超えた結合関係を取り結ぶことができた。しかし、X地域の生活は、職業生活まで含めて地域内で完結していたため、地域の外の人とは社会関係を結ぶ機会をほとんど持つことはなかったのである。結果として、隣接地域の日本人にとっては、X地域の生活の異質性のみが、過度に意識される傾向となり、日本人・在日韓国・朝鮮人ともに、強い「分離志向」や「分離関

係」をもつことにつながったのではないだろうか。

そして、町内会活動など、X地域の在日韓国・朝鮮人と何らかの関係を持つ必要があるときには、「異質性を意識しない」という姿勢で、異民族と向き合ってきたようである。以下の町内会の役員の言葉が、それをあらわしているであろう。

「町内会では、そういうこと（民族・国籍）は関係ありません。みんな同じだと思っております。あそこ（X地域）が、朝鮮の人ばかりだということは、我々も知っております。だからといって、我々は、あそこの人を特別に扱ったこともありませんし、これからも同じです。（調査に）お答えできるのは、これだけです。」（X町内会役員の話し 某年10月25日 電話にて）

なお、X地域の住民が加入しているX町内会は、100世帯余りで構成されており、そのうち約半数が、在日韓国・朝鮮人世帯である。総代は、日本人しかなくなったことはなく、近年になって、副総代に、在日韓国・朝鮮人になることもできるようになったという。

4. X地域の現在

冒頭でも述べたように、現在のX地域には、戦前もしくは戦後すぐに建てられたと思われる老朽化した家が建ち並び、空き家も目立つ。在日韓国・朝鮮人のエスニックコミュニティとしてのX地域が衰退の方向にあることは明らかである。

その理由の一つは、ウエス加工業の衰退である。今では、ウエス加工を生業としている家はわずか4-5軒しかない。他にも「小遣い程度になればと思って、内職の代わりに、注文があれば手袋を縫っている」（Eさん）者もいるが、ほとんどは廃業してしまった。業界自体が景気に大きく左右され、先細りになったことが主要な要因である。さらに、X地域の人たちが、自分の子どもを後継者にすることを望まなかったことも、もう一つの大きな要因であると考えられる。「自分たちは他にやる仕事なかったから、ウエスを一生懸命作ってきたが、あんな仕事、子どもにやらせたくはなかった。子どもに継がせるような仕事ではない」と口々に語っていた。

ウエス加工は、大きな資本や投資を必要としなかった（「ミシン一台あればできる仕事」）。また、慣れによる仕事の処理能力は必要とされるものの、基本的には高度な熟練技術がなくてもできる仕事だったため、「技術の伝達」などという職人的な意識や誇りも形成されなかった。こうした理由から、ウエス加工業を次世代に継承しよう

という望みや執着は、X地域の在日韓国・朝鮮人の中には全く生まれなかったようである。そして、ウエス全盛期に子ども時代を過ごした人も、以下のように語る。

「僕は、子どもの頃から、あの部落を抜け出たくてしょうがなかった。そりゃ、イヤですよ。とにかく、仕事がイヤだった。ウエスって一言で言うけど、僕にしたら、『あんな仕事』っていう思いですよ。臭いし、汚いし。子どもの頃から手伝っていましたよ。ウエスたたむのを手伝いながら、『この部落を抜け出さないと、僕の将来はない』って思っていました。大人たちは、そんなことは思っていなかったと思いますよ。他を知らないんだから。当時にすれば、ウエスさえ文句言わずにやっていたら、飯は食える。部落内にいけば、朝鮮人だけで生活できるから、日本人のことは気にしないでいい。そういう意識でいけば、あそこは居心地のいい場所だったでしょうね。でも、僕はイヤだった。」（Dさん）

さらに、地域内の環境も、若い世代の流出に拍車をかけたようだ。

「若い人はここを嫌って、外に出てしまったからね。年寄りばっかになって、寂しくなったね。〔なぜ、若い世代はここを嫌がるんでしょうか？〕何もないからでしょう。親（の仕事）はウエスで、それは継いでも仕方ない。土地も借地で、地主さんとの（権利）関係も複雑なところが多いから、ここで家を持ってなんて考えると面倒だしね。ここにいる必要は全然ない。」（Bさん）

「うちは長男も、出て行ってしまった。新川町内に家を買ったけど、ここはイヤだって。面倒だって言うんだよね、つき合いがさ。私は、ここに来て、60年の余経っているから、今さら動きたくない。だから、今、一人で住んでいるんだけど。いずれは、息子の所に行くことになるかね。若い人は、ここがイヤなんだろうね。みんな出て行きたがる。」（Fさん）

「子どもがここをイヤだっていう気持ちもわかりましたよ。この中にいるとこし分かからない。朝鮮式の生活は自然に覚えるだろうけれど、でも、それが日本の社会で通用するかっていうと、ちょっと疑問にも思いますね。ここにいる朝鮮人、昔のことだから仕方ないけど、学がないでしょう。貧乏で学校にも行けない、朝鮮でも食べられなくなって、日本に来た人が多いんだから。だから、みんな固まって生活してきたんだわね。それはそれで、

仕方ないし、私らもそうやって生きてきた。でもね、私は、子どもには広い世界を見せたかった。外の世界を見てしまったら、子どもはここには戻りたくないっていうのも分かるような気がしますよ。」(Iさん 1923年生・男性)

しかし、X地域のように戦前から戦後にかけて存続した在日韓国・朝鮮人のコミュニティは、愛知県内では数少ないため、地域が衰退の一途をたどっていることを残念がる声も多い。それは、X地域が在日韓国・朝鮮人の集住地として存在しているだけで、自然に、民族の生活、習慣、風俗、文化を温存し、かつ、それらを、世代を超えて継承していく役割を果たしていたという思いがあるからである。X地域を管轄する総聯の支部も、学校の跡地利用をして、在日韓国・朝鮮人の高齢者の施設を作ることを検討したり、「X地域の存在を支部内の同胞にも再認識してもらうために」学校跡地で支部の花見を企画する等々、地域の再活性化をはかろうとはしている。しかしながら、X地域内部から、それに向けて積極的に動く力が出てこないため、なかなか進展しない模様である。

「難しいですよ。地域の人の生活は地域の中だけで充足してきたでしょう。ここで何かしようとしたら、外に向けて色々しないといけない。でも、その必要性を中の人は感じていないのかもしれないし、どうすればいいのかわからないのかもしれない。でも、中の人が動かなければ、私のように余所から来た者が、いくらやろうとしても限界があります。でも、朝鮮人がみんな分散して住むようになって、こういう朝鮮人の部落がなくなってしまふのは残念ですよ。でもね、確かに、区画整理も再開発もないままじゃ、ここに住みたいという気持ちは生まれませんよね。火事が起きたらおしまい。きっと、アッという間に燃え移るだろうし、消防車も救急車も入れないですからね。昔のように朝鮮人が貧しかったら、ここに住むしかなかったでしょうけれど、今では、好んではここに住まないでしょうね。」(総聯名駅支部役員)

5. おわりに

本稿では、新川町X地域という在日韓国・朝鮮人の集住地区を取り上げ、地区形成過程に関して、前稿を補足する形で考察を行い、さらに、そこに住む在日韓国・朝鮮人の生活世界および日本人との民族関係について、生活史をもとに、記述と検討を行った。得られた知見を簡単に整理する形で、まとめに代えることとしたい。

① 戦前、新川町の産業化の進展にともなって、朝鮮

人労働者も就業先を求めて新川町に流入してきた。大きな契機は、豊田式織機株式会社が新川町に工場を設立したことである。詳細は明らかににはならないが、大阪市など他の都市のケースから類推すると、おそらく、下請けの町工場が町内にでき、そこでの労働(低賃金の未熟練労働)市場に朝鮮人も吸収され、朝鮮人人口の増加につながったのであろう。

② X地域の形成過程は、前稿でも記したように新川製紙(当時)の荷役として朝鮮人が雇われていたことと関連がある。工場前の堤防のすぐ下にあるX地域が居住地として選ばれ、そこは、低湿地帯で日本人が住みたがらない地域で、低廉な家賃の長屋が建ち並んだ。就労先と住居、そして、地縁・血縁、こうした朝鮮人が集住しやすい条件が、X地域には整っていたと考えられる。

③ 戦後は、X地域の在日韓国・朝鮮人のほとんどはウエス加工業を生業とした。戦前は、周辺部の労働市場に雇用されていたが、戦後は、そうした領域からも排除された。生きていく術として、資本も技術も必要とせず、かつ、日本人が嫌がったウエス加工業に従事することで、日本への定住の基盤を作った。

④ X地域は、戦後、在日本朝鮮人連盟から在日本朝鮮人総聯合会につながる組織の影響力が非常に強い地域であり、組織主導で民族運動や民族教育が盛んに行われた。立場によって、評価は分かれるものの、こうした民族組織の活動が、戦後の一定期間、地域の在日韓国・朝鮮人を結束させる役割を果たしていた。

⑤ 組織的な運動とは異なった日常的な次元では、X地域の在日韓国・朝鮮人たちは、強固なネットワークを持っていた。日常生活、求職の形態にそれらは見られる。同時に、地域内においては、民族性の強い行事が行われていた。

⑥ X地域内は、在日韓国・朝鮮人が圧倒的多数を占めるが、数少ない日本人とは結合的な民族関係が取り結ばれていた。西田芳正が大阪都市圏の在日韓国・朝鮮人親族の生活史調査から析出した「集住地効果」が、X地域においても見出された。

⑦ しかし、その効果は、隣接地域には全く波及していない。隣接地域においては、むしろ、在日韓国・朝鮮人と日本人の分離関係が見出された。

ただし、これらは、主として戦前生まれの在日韓国・朝鮮人と日本人の生活史から得られた知見である。戦後生まれ、特に高度経済成長期からそれ以降にX地域に生

まれ、育った在日韓国・朝鮮人や日本人の生活史を聞きとることは、ほとんどできていない。彼／彼女たちの生活史から、在日韓国・朝鮮人の民族文化の継承と断絶、および地域の社会関係や民族関係の持続と変容を捉える必要があろう。また、大阪都市圏にあるような大規模かつ日本人との混住化が進んだ地域との比較検討も必要な作業であらう。今後の自らの継続課題としたい。

〔付記〕本研究をすすめるにあたって、X地域の人々、民団愛知県本部、総連名駅支部、新川町役場には大変お世話になった。また、インフォーマントを紹介して下さったのは、自治労連愛知県本部副執行委員長（当時）の柿内公子さんおよび総連の名駅支部委員長（当時）である。お二人は、一緒に地域を回って下さり、インフォーマントの方々と私との間の橋渡しをして下さった。記して感謝申し上げる。

また、本研究は、1999年度愛知県立大学学長特別研究の助成を受けておこなった成果の一部である。本来は、昨年度中に成果公表する予定であったが、病気のため、大幅に遅れたことをお詫びしたい。

注

- 1 拙稿「愛知県におけるエスニックコミュニティの研究(1)-新川町の在日韓国・朝鮮人集住地区X地域を事例として-」『愛知県立大学文学部論集』第47号 1998年 pp173-192
- 2 この呼称をめぐって、様々な議論があることは承知している。しかし、本稿で、実情にあわせた包括的な呼称として「在日韓国・朝鮮人」を使用することとする。ただし、戦前の状況を論じる文中では、「朝鮮人」という呼称を使用することもある。
- 3 民族関係の枠組みについては、前稿を参照のこと
- 4 新川町の高齢化率も高く、2000年4月1日現在で15.48%。西春日井郡では一番の高率である。（新川役場での聞き取りより）
- 5 谷富夫「民族関係の社会学的研究のための覚書き-大阪市旧猪飼野・木野地区を事例として」『広島女子大学文学部紀要』第24号をはじめとして、その後、民族関係を分析することを重要性を繰り返し説いている。
- 6 文部省科学研究費補助金（基盤研究（A）(1)）を受けて行った「民族関係における結合と分離の社会的メカニズム」がその代表的なものである。
- 7 田村紀之「内務省警保局調査による朝鮮人口(I)～(V)」(東京都立大学『経済と経済学』第46～50号1981年～1983年)および西成田豊『在日朝鮮人の「世界」と帝国国家』(東大出版会、1997年)などに詳細に記されている。
- 8 実際に、2000年9月の東海豪雨では、X地域を含むX町内会区域は床上浸水77戸、床下浸水2戸の被害を受けた。
- 9 おそらく、1949年に出された学校閉鎖令により、全国の朝鮮学校が強制閉鎖された時のことだと思われる。閉鎖後、総連は、北朝鮮の援助も受けて民族学校の再建を行った。X地域にあった愛知朝鮮第九初級学校もその一つである。
- 10 谷富夫(1995: 148-149)は、結合的な民族関係は「友人関係など自由な個人同士の民族間の結合関係はある意味で容易

といえる」と指摘し、むしろ、個人が集団の一員として、異民族と出会った際に、「共同の困難が発生」と指摘している。ここであげた事例も、「個人レベル」の域を出ない「結合関係」であることは、留意しておかねばならないだろう。

参考文献

- A 工業株式会社、1988、『A工業50年史』
- 愛知県、1972、『愛知県昭和史 上・下巻』
- 原尻英樹、1989、『在日朝鮮人の生活世界』弘文堂
- 許光茂、2000、「戦前京都の都市下層と朝鮮人の流入-朝鮮人の部落への流入がもつ歴史的意義をめぐって」『コリアンマイノリティ研究』第4号: 66-87
- 豊和工業株式会社、1987、『豊和工業八十年史』
- 稲月正・山本かほり、1996、「在日韓国・朝鮮人と階層構造」八木正編『被差別世界と社会学』明石書店: 47-78
- 金賛汀、1997、『在日コリアン百年史』三五館
- 名古屋市、1953、『大正昭和 名古屋市史』
- 名古屋市、2000、『新修 名古屋市史 第5巻・第6巻』
- 日本地誌研究所、1972、『日本地誌 第12韓 愛知県・岐阜県』
- 二階堂裕子、2000、「民族関係の結合と分離」谷富夫編『民族関係における結合と分離の社会的メカニズム』大阪市立大学（科研費報告書）: 353-399
- 西田芳正、2000、「エスニシティの顕在-潜在」同上書: 401-424
- 西村雄郎、1999、「阪神都市圏における流入労働者の『定住』構造」『地域社会学会年報』11集: 57-78
- 西成田豊、1997、『在日朝鮮人の『世界』と『帝国』国家』東京大学出版会
- 朴在一、1957、『在日朝鮮人に関する総合的調査研究』緑陰書房
- 新川町、1955、『新川町誌』（復刻版、2000）
- 杉原達、1998、『越境する民-近代大阪の朝鮮人史研究』新幹社
- 谷富夫、1989、「民族関係の社会学的研究のための覚書き-大阪市旧猪飼野・木野地区を事例として」『広島女子大学文学部研究紀要』第24号
- 、1992、「エスニックコミュニティの生態研究」鈴木広編『現代都市を解読する』ミネルヴァ書房: 260-283
- 編、2000、『民族関係における結合と分離のメカニズム』大阪市立大学（科研費報告書）
- 、2001、「都市の民族関係に関する中範囲の理論化」金子勇・森岡清志編『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房: 272-288
- 山本かほり、1998、「愛知県におけるエスニックコミュニティの研究(1)-新川町の在日韓国・朝鮮人集住地区X地域を事例として-」『愛知県立大学文学部論集』第47号: 173-192
- 在日本大韓国民団愛知県本部、1997、『民団愛知五十年史』

A Study on an Ethnic Community in Aichi Prefecture (2)

- A Case Study of X Korean Community in Shinkawa Town-

YAMAMOTO Kaori

The aim of this paper is to present an ethnographical description on X Korean community of about 60 households in Shinkawa town, Aichi prefecture. This community is unique in that more than 90 % of its population are Koreans as many Korean communities in Japan are now mixed with Japanese. In this sense, this community can still be regarded as an old type “Korean community,” surviving the World War II.

Presenting an ethnography on X Korean community, the author intends to overview the lives of Koreans (lives as lived), and also tries to analyze the inter-ethnic relationships between Koreans and Japanese in this community.

First, to describe the lives of the people in X community, life histories of Koreans are examined. Koreans have had a network to survive in difficult days after the war, and they have been supporting each other in their community. In addition, the *Chungryun*, or the General Association of Korean Residents in Japan, had a strong influence on the community, and this community has been a center of the ethnic/political movements in the Nishiharu area.

Second, though the community has only 4-5 Japanese households, good inter-ethnic relationships between Koreans and Japanese can be found. However, this is limited within this community. The relationships between Koreans and Japanese in other communities, even in its adjacent communities, are not good, having no contact in their daily lives.

For future studies, examination of life histories of younger generations and comparative studies with other Korean communities such as Ikuno in Osaka remain to be done to deepen understandings on the community.